

編集後記

本年の「日本文学紀要」は研究論文六篇、鼎談一篇、研究余滴一篇を収めることができた。「古事記」からポップカルチャーまで幅広い研究領域が展開されていて、各分野での成果をみることができよう。鼎談は遠藤周作が慶應義塾大学時代に「ひよこ」と名付けた同窓生で白百合学園の修道女松井千恵さんが遠藤について語ったものである。数年前に、肺結核で闘病生活を送っていた遠藤が松井さんに送った六通の書簡が見つかり、『沈黙』のポイントをうちあけているとして話題となった。こうした作家研究に裨益する資料の発表にも努めてほしいものである。

昨年は日本の文化が注目を浴びた。富士山の世界文化遺産登録に始まり、東京五輪オリンピック招致の成功は、プレゼンテーションで滝川クリステルさんが合掌のポーズで「お・も・て・な・し」といった言葉が大きく貢献したといわれる。その言葉は日本文化の一端を示すものである。そして十二月になって「和食」もユネスコの無形文化遺産に登録された。

文化と文学は一つの織物の縦糸と横糸のようなものだろう。文化は人間が築き上げてきた生活様式、精神的活動の有形無形の総体である。それを言語で表現しようとするものが文学であり、言語によって文化が生み出されることにもなる。

言語を表現手段とする文学において、その言語は情報を処理して端的に示すという言語本来の働きだけではない。言語を媒介として理解がたいこと、いい表せないことを表現しようとするのが文学であり、「すぐれた文学とは、われわれを感動させ、その感動を経験したあとでは、われわれが自分を何か変革されたものとして感ぜずにはおられない」と桑原武夫はいう。文藝評論も研究論文も究極のところそうだろう。言霊である言葉のちからを信じて、一篇の論文を仕上げられればこれ以上の喜びはない。

末筆になったが、一冊の紀要ができる陰には編集室の方々のなみなみならぬご盡力がある。厚く謝意を表したい。

(U・Y)

編集委員 檜田 良枝
齋藤 彰
久下 裕利

学苑 八百七十九号

定価 八四〇円(本体八〇〇円)

購読料 一カ年分 一〇〇八〇円

(本体 九六〇〇円)

平成二十五年十二月二十日 印刷

平成二十六年 一月 一日 発行

編集発行人 齋藤 彰

印刷所 三 秀 舎

発行所 昭和女子大学

近代文化研究所

〒154-8533 東京都世田谷区太子堂

一ノ七ノ五七

電話 03 (三四二) 五三〇〇

☆掲載論文の無断転載を禁じます。